

## 長野県人口定着・確かな暮らし実現会議 議事録

日 時：平成26年11月19日（水）

午前10時～午後11時45分

場 所：長野県庁 3階 特別会議室

### 1 開 会

#### ○原山企画振興部長

ただいまから第2回「長野県人口定着・確かな暮らし実現会議」を開会いたします。

本日まで出席の委員様方におかれましては、大変お忙しいところをご参加いただき、ありがとうございます。

それでは最初に、阿部知事からごあいさつを申し上げます。

### 2 知事あいさつ

#### ○阿部知事

おはようございます。皆様方には、ご多忙の中ご参加いただきまして、大変ありがとうございます。

衆議院解散ということになってきたようでありますけれども、国においては、まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定に向けての検討が進められているわけでありまして、国の動きにも呼応しつつ、長野県としても人口減少社会にしっかりと向き合い、かつ人口減少化でも活力ある地域を維持するための方策を見出していかなければいけないと考えております。

政府からは、まち・ひと・しごと創生総合戦略の骨子が今月6日に示されたところですが、政局の動向もあり、今後のスケジュールは不透明な状況であります。こうした状況ではありますが、県としては、年明けから中間取りまじめに向けた議論をしっかりと詰めていきたいと思っております。

本日と来月17日の会議では、ゲストスピーカーの方からの話を踏まえて、まずは幅広く意見交換をしていきたいと考えております。

本日は、千葉大学教授の廣井良典様、そしてわらしべキッチン代表の川渕友絵様からお話をいただきます。幅広い見地からのご意見を賜りますことを心から期待しております。

ぜひこの地方創生の議論を長野県のさらなる発展、県民の暮らしがしっかりと維持され、安心して暮らせる社会をつくっていくための大きな転機にしていきたいと思っておりますので、皆様方の忌憚のないご意見をいただきますことを心からお願いして、私の冒頭のあいさつとしたいと思っております。よろしく申し上げます。

### 3 会議事項

#### (1) 長野県の移住者に関するアンケート結果について

##### ○原山企画振興部長

それでは会議事項に入りたいと思いますが、長野県の移住者に関するアンケート結果がございますので、その説明を事務局からさせていただきます。

##### ○佐藤地域振興課長

地域振興課長の佐藤と申します。よろしくお願いたします。失礼ですが、座って説明させていただきます。

お手元にごございます資料1と資料2-1を対比してご説明をさせていただきます。

資料1は、東京にお住まいの1,200名の方へのアンケート調査でございます。また資料2-1は、昨年度1年間、東京・名古屋・大阪で、長野県に暮らしてみたいという方々を対象とした県のセミナーにご参加をいただいた280組、合計370の方を対象としたアンケート結果でございます。質問の内容等が多少似通った部分もございますので、少し対比させながらご説明をさせていただきたいと思っております。

それでは資料1のポイント1から順次ご説明申し上げます。東京在住の約4割の方々が移住をしたいという回答をしています。この4割の中には、時期を特定せずに、いつか将来的にというような方も含まれております。

年齢別に見ますと、30代以下の若年層及び50代の男性に対する意識が高い状況でございます。私どもも移住セミナーをやっておりますけれども、ここ1年余り、特に30代前後のお子さんが産まれたばかりの方々からの移住をしたいというご相談が増えている状況でございます。

ポイント2の移住検討のきっかけや移住をする理由につきましては、年代・性別によって大きく異なっているという結果になっています。

また、ポイント3の移住する上での不安、懸念としましては、やはり働き口が見つからないということと、日常生活や公共交通の利便性が低いということが挙げられています。

資料2-1をご覧いただき、ご参加いただいた年齢を見ますと、30代から60代にかけて、まんべんなくお越しいただいております。

移住先での家族形態は、夫婦や一人暮らしの方が中心になっておりますが、6の生活基盤、移住先でどういった形で生活をしていくのかというアンケートをとりますと、会社員、企業等に就職をして働きたいという方が大多数でございます。続きまして農業ですとか、あとは年金等で暮らしたいといった方々が増えております。

年金等で暮らすという方についてお話をお聞きしますと、年金プラス、アルバイト等でも結構なので、お小遣い稼ぎ等をしたいといったご意見がかなり多くあります。

もう一度、資料1にお戻りいただきますと、ポイント4ですが、移住を検討するに当たって重視する点として、生活コスト、日常生活や公共交通の利便性というのが挙がっております。

田舎暮らしセミナーにご参加いただいた方々のアンケートの自由記述を見ますと、長野

県というのは自然が豊かで、空気がきれいで、環境にとってもやさしい県だからぜひ住んでみたいといったご意見をいただく一方で、公共交通機関等が不便だということと、冬の生活に慣れていच्छゃらない、都会暮らしの方々にとってみますと、雪というのが一つのネックになりますので、雪かきや雪道をチェーン等で走行しなければならないのではないかとといった不安もいただいております。

ポイント4に戻りますが、出身地以外の方が地方へ移住する場合、IターンやJターンをされる場合は、移住先に関する情報がなかなか手に入らないというご意見をいただいております。私どもは、年に10回、三大都市圏でセミナー等を開催するほか、今年10月にオープンいたしました銀座NAGANOに移住相談員を配置し、相談を受け付けているところでございます。

もう一度、資料2-1をご覧くださいと思います。先ほど移住するに当たって、心配事の一つに働き口というお話がございました。もう一つ、大きなことでありますのが、移住先での住まいでございます。移住先でどんな住まいを希望されるかというアンケートに対しまして、7のところですが、賃貸、購入にかかわらず圧倒的に一戸建の住宅がほしいという声が多くございます。これは新築、中古にこだわらず、一戸建という方が大多数でございます。

資料2-2をご覧くださいますと、長野県に県外からお越しになられる転入者は、年間34,000人ほどおります。残念ながら、県外へ転出される方が36,000人ほどですので、社会減が2,000人程度になります。年間34,000~35,000人ほどお越しいただく中で、実際に移住という形の方が何人いच्छゃるかというのがなかなか統計ではつかめないものですから、今年9月から市町村の協力をいただき、実際に転入された方が、移住でどの程度来られたのか、あるいは移住でない理由でお越しになられたかを、アンケート調査をしております。それをまとめたものが、資料2-2でございます。

今のところ39の市町村の協力で、アンケート調査という形で回答いただいておりますので、全てを把握できるわけではございませんけれども、回答いただいたほぼ半分近くの方々が、いわゆる田舎暮らしをしたいですとか、転職、あるいは起業するという観点で、長野県にお越しをいただいております。残り半分、6割近くがいわゆる通常の会社の転勤ですとか、結婚、進学という形になっております。

そういった皆様からいただく声としては、市の移住相談窓口等の紹介で住居が決まりましたとか、その市町村においても移住者受け入れのための支援をしていただきたいということですか、別荘や旅行に来て長野県が好きになったので、長野県にぜひ移住したいといった理由で、長野県への移住を決めていただいたという方々が大勢でございます。

詳しい統計の内容につきましては、2ページ目に記載をさせていただいておりますので、後ほどご覧いただければと思います。説明は以上でございます。

## (2) 講演

### ○原山企画振興部長

ありがとうございました。それでは次に、本日、ゲストスピーカーとしてお招きをいたしました、千葉大学法政経学部教授の廣井良典様から、ご講演を頂戴いたしたいと思いま

す。では、廣井先生、よろしくお願いいたします。

#### ○廣井教授

皆様こんにちは。ご紹介いただきました廣井でございます。まず、このような非常に貴重な機会に参加させていただきまして、大変光栄に存じております。

あとは、大森先生に以前からお世話になっておりまして、十分な話ができるか、心もとない面がございますが、ひとまず私のほうから話題提供をさせていただければと思います。

長野県とはいろいろな接点を持たせていただいております。一つは、やや個人的なことになりますけれども、八ヶ岳方面には月一回ぐらいは行っておりますので、富士見町や原村あたりについては、もしかしたら皆様より詳しいかもしれないというようなことがありますし、小布施での自然エネルギー関係のプロジェクトも進めさせていただいたりしております。そういったこともお話の中で織り混ぜさせていただければと思っております。

お手元にある資料に沿う形で、と言ってもやや資料をたくさん入れ過ぎた感じがありますので、かいつまんでお話をさせていただければと思っております。

まず最初に、全体的な、人口減少というテーマをどのように考えるかということ、二、三、お話させていただければと思います。

今お示しておりますのは、2010年の国際経済誌エコノミストの表紙です。日本特集だったわけですが、大きな日の丸の下で子どもがつぶれそうになっているというような感じの絵でして、ジャパズバーダン (Japan's burden) と書かれております。日本が直面している課題の中心にあるのは、人口減少と高齢化であると。ただ、このテーマに、日本はある意味では、世界の先頭に立って立ち向かっていくことになるので、日本がこの問題にどうかかわっていくかというのは単に日本だけにとどまる問題ではなく、世界にとって意味があるというようなことで、これにどういう形で対応していくかということが、今、課題であるということは、改めて言うまでもないことと思います。

これも皆様にとっては既知のことと思いますが、今ご覧いただいております資料ですが、人口のトレンドは、江戸時代くらいまで3,000万人ぐらいで安定していたのが、明治維新以降、急激に人口が増える形で来たわけですね。線が直立するぐらいのペースで人口が増えていたのが、2005年に初めて減少に転じ、これから人口減少が本格化するという事になっております。

当然、そこには、いろいろな大変な問題があるということは確かであるとは思いますが、私自身は必ずしも全てマイナスのことばかりとは言えない、むしろ積極的な可能性も秘められているのではないかと考えています。人口が急激に増加、拡大をしてしまった中で、いろいろな矛盾やちょっと無理をしてきた部分もあるので、いわば本当の意味の豊かさというようなものを実現していく一つのチャンスであり、また出発点とも言えるのではないかと感じたりしております。

もう一つ、このグラフの明治以降、人口が急増していた時代というのは、一言で言えば、全てが東京に向かって流れていった時代だったと言えると思います。よくも悪くも東京がどんどん中心になって、人の流れやあらゆるものが東京に向かって、あるいは大都市圏に向かって流れていた。それがこれからは逆の流れになっていく時代でありますので、従来の延長線上には、物事は進まないのではないかとこの視点が大事ではないかと思っております。

ます。

今スライドに示しておりますように、そもそも人口減少をどういう視点で考えるかということにつきまして、今、申しましたように、これまでの延長線上には事態は進まない。あるいは、これまでとは逆の流れが生じるような時代を向かえつつあるのではないかと考えております。

若い世代のローカル志向、これは後で触れさせていただきたいと思いますが、若い世代がローカルなもの、地域への志向というのを非常に高めている状況があるのではないかと。それから、今お話ししましたように、東京などの大都市に向かった流れと逆の異なる流れ、それから、人口増の時代は、こっちの地域は進んでいる、こっちの地域は遅れている、東京は進んでいる、地方は遅れているという時間軸で物事を見る傾向が強くなる時代であったのが、それに対して、ある意味で空間軸といいますか、それぞれの地域が持つ固有の豊かさとか、風土的・文化的多様性といったものに関心が向かう時代ではないかと考えております。

その中で、若い世代のローカル志向ということで、私が一番身近に感じますのは、ゼミの学生を見ておまして、例えば静岡のある町出身の学生が、自分が生まれ育った町を世界一住みやすい町にするのが自分のテーマであるとか、新潟出身の別の学生が、新潟の農業をもっと再生したいとか、愛郷心をテーマにする。あるいは海外に留学していた学生が、その地元や地域にUターン、Iターンといった例が非常に増えている印象を持っております。ヤンキー経済論というものもありますけれども、かなりこういったローカル志向というのが時代の流れとしてある。このローカル人材とでも言うべきものを支援していくような政策が非常に重要ではないか、これは後でもう少し具体的に触れさせていただければと思います。

今、私自身の周りのことを触れましたけれど、いろいろな資料を見ましても、例えばリクルート進学総研の調査で、大学に進学した者のうち、49%が大学進学に当たり地元に残りたいと考えて志望校を選んでいて、この数字は4年前に比べて10ポイント増加し、かなり変化が見られる。

高校生の県外就職率が下がっているというのは、むしろ県内就職率が高まっているということであったり、今住む地域に永住したいと答える者が増えている。こういう傾向がいろいろなところから見てとれると思います。

それから、これも面白い点だと思うのですが、今ご覧いただいているのは、首都圏の私立大学に入学する地方出身者の割合が着実に低下しているというものです。3割ぐらいにまでなっている。これは逆に言えば、東京の大学には東京の学生が行くようになっている。ローカル化が進むということです。つまり首都圏の大学の7割は首都圏の学生であるという、地元志向がこういった面でも強まっているということで、これも後でもう少し考えてみたいと思います。

もう一つ、よく仕事がないから地方でなく大都市に行くという話があるわけですが、それは必ずしも当てはまらなくなっている面があるのではないかと考えております。今ご覧いただいております数字は、失業率の都道府県別のワースト10です。どちらかというと大都市圏の県が名を連ねており、これまでのような大都市に行けば仕事があるという状況自体もかなり大きく変化しているということで、こういった点を踏まえた政策を考え

ていく必要があるということです。

それから、人口減少社会の基本的視点で、私自身重要ではないかと思っておりますのは、従来の拡大・成長型の発想だけでは解決しないのではないかということです。一番わかりやすい例が、皆様もご案内のとおり、出生率が一番低いのが東京で、一番高いのが沖縄という事実です。このことから示されておりますように、あるいは学生などにレポートを書かせると、労働時間が長すぎ子供を産み育てる余裕がないといった点を挙げる学生が予想以上に多かったり、例えば「24時間働けますか」的な発想ではなくて、むしろ歩くスピードを少し緩めるような方向で、その結果として、自然に出生率も改善するというようなこと。そして、後で触れます人生前半の社会保障というようなことが重要ではないかと思っております。

アンケート調査結果を何枚か示しておりますけれども、これは全国の自治体に、今地域の課題で何が大きいかというのを聞いたものです。お示ししております図で、上のほうが小さな自治体、下のほうが大都市圏になっております。一番下は合計です。

小さな自治体になると、やはり人口減少や若者流出というようなことが圧倒的に大きな課題で、中堅の都市になると、中心市街地の衰退といったテーマ、それから都市の規模が大きくなりますと、コミュニティのつながりの希薄化や孤独といった、ソフト面といったものが課題になっているということです。地域ごとに少し分けて考える必要があるということでありまして、別の角度からいいますと、それぞれの地域が魅力と問題を持っている。それをもう少しうまくつないでいくことで、解決が図られることがあるのではないかと思っております。

今日の私の話の柱の一つが、若い世代の支援が重要だということであり、今ご覧いただいております資料は、やはり失業率が一番高いのは10代後半から30代前半の若い世代であるということです。低成長時代になると雇用のパイが限られてくるので、若い世代に特にしわ寄せが行きやすいという状況があると思います。

そういう中で、私自身は人生前半の社会保障というような言い方をしておりますけれども、社会保障全体のうち、高齢者関係が7割近くを占め、若者や子育て世帯に対する支援がかなり不足していると。

それからここでもう一つ重要だと思いたすのが、最近300万円の壁というような言い方もされますけれども、20代後半から30代前半の男性の年収の300万円の上と下を分岐点にして結婚率に大きな違いがある。だから、20代の生活保障や所得のあり方が結婚、ひいては出生率にも非常に大きな影響がある。これは、先生方はもうご案内のとおりだと思いますけれども、結婚したカップルの子供の数はほとんど減っていないわけでありまして、むしろ未婚や晩婚化が少子化の基本的な背景でありますので、結婚する前のところでのサポートというのが非常に重要なわけで、例えば高度成長期は公団の住宅というのを大規模に建てたりして、かなりこういった世代に対する支援があったのが、その辺りが非常に不足している面がありますので、この辺も少し発想を切りかえていく必要があるのではないかと思います。

今ご覧をいただいているのは、例えば日本とデンマークの社会保障の規模を比べますと、高齢化率はあまり変わらないんですが、年金はむしろ日本のほうが大きいくらいです。それに対して社会保障のトータルになると、大きな違いがあるというのは、結局、高齢者以

外の層に対する支援というのが日本の場合は非常に不足しているということがありますので、ここら辺りは、社会保障のあり方という点からも考えていく必要があるかと思えます。そういう人生前半の社会保障が低いという資料を幾つか、教育も含めて、その後に入れております。

長野県のここが重要なのではないかと私自身が思う点でございますけれども、21ページですが、先ほどの資料のご説明にもありましたように、一つはやはり住宅支援というのは重要であろうかと思えます。これは単身者も含めて、生活の基盤の支援ということで、これは一つ重要であろうと。

それから、ここがやはりポイントの一つではないかといいますのは、学びの場、特に高校卒業以降の整備ということで、これは、私自身はやや意外に思った点なんですけれども、長野出身の学生に聞きましたところ、意外に長野県は都道府県人口に対する学生数比率が低い。大体どの自治体も高校卒業後に一旦、人口が流出するというのはあるわけですが、やはり、長野はかなり戻ってくる割合が大きいと伺っておりますけれども。未然に食いとめるといいますか、先ほど言いましたように、地元の大学に行きたいというニーズはかなり高まっているというのがいろいろな資料からも見えますし、また、長野県は、学びの環境という意味では最高の場所だと言えらると思えますので、その部分での学びの場の整備というのが重要ではないかと思えます。今大学の新設が一、二あるというのも伺っておりますけれども。例えば大学に限らず、高専の現代版というふうにしておりますけれども、介護・福祉やサービス業、アート・文化、環境職人的な仕事といった、似たようなことで、例えばフィンランドが専門学校のような多様な領域を扱うものを大学のような形に格上げして支援しているということもあったり、この辺が一つ、考えられていいのではないかということで、フィンランドの例なんかもその後に少し入れております。

それから、その延長で、23ページのところですけれども、国が行っております地域おこし協力隊や、新・田舎で働き隊の都道府県版のようなものも考えて、都市と農村をつなぐような施策、それから、後でも触れたいと思えますけれども、自然エネルギーのポテンシャル、長野県は大きいので、農業はもちろんそうですが、地域で循環するような経済をつくっていく中での雇用創出、これはもちろん、言うはやすく実際にはいろいろな課題もあると思えますけれども、こういう方向。IT環境などのインフラ整備や起業支援。それから、時間の関係でゆっくりは触れられないと思うんですけれども、私自身が鎮守の森のプロジェクトというのをやっている関係で、祭りが盛んな地域では、若者のUターンや定着が多いという指摘も聞いたりもしますので、伝統文化や地場産業、職人的仕事の支援といったことも重要になってくるかと思えます。

もう一つポイントとなることで、「多極集中」と福祉都市およびコミュニティ経済という空間的な地理的な話も簡潔に触れさせていただければと思います。

私自身は、一言で言えば多極集中とも言えるような地域のあり方が、この人口減少時代にあって重要ではないかと思っております。多極集中というのは、一極集中でもないし、その反対の多極分散でもない。多極化しながら、それぞれの地域はある程度集約的なものにしていくということで、今年出た国土交通省の国土のランドデザインでも「小さな拠点」という話がございますけれども、そういったところとも重なるものと思っております。

これは今回、少し調べてみて思った点なんです、今ご覧いただいております26ページの資料は、それぞれの県で上位の2都市への人口の集中度を示したものです。左が集中度の高い都道府県です。京都とか岡山、岡山を赤にしているのは、私は出身が岡山なんです、一つの典型的な例で、岡山なんかの場合は岡山市と倉敷市に6割が集中してしまっています。逆に、右側が集中度の低い都道府県で、長野県はこれに入って、長野市、松本市でもそれほどにはならないということです。

私はこれはいい側面ではないかと思っておりまして、次のページですけれども、長野県の特徴として、特定の都市への人口集中が少なく、多極的であり、その点は望ましい姿ではないかと言えるのではないかと。

ただ、それぞれの極となる都市構造がやや拡散的であり、多極集中というより、多極分散ないし多極拡散となっているような面があるのではないかとということで、むしろ多極集中という姿を念頭において、集約的かつ循環的な都市地域にしていくという政策が課題ではないか、福祉都市とコミュニティ経済というようなことが重要ではないかということです。

29ページから写真をイメージとして入れております。私はヨーロッパの、とりわけドイツ以北、ドイツ、北欧辺りのあり方が成熟社会の町の姿として最も望ましい姿に近いのではないかと考えております。29ページは、自動車道だったところを完全に歩行者専用道にしている。これはドイツのほとんどの都市で見られる姿です。

それから、中心部を歩行者専用空間にすることが30ページのような形で、福祉的な機能と同時に、町の賑わいという点でもいろいろな意味でプラスになると。

31ページはドイツ南部のエアランゲンという10万人ぐらいの規模の都市です。中心部をこういうふう完全に歩行者中心にしているということで、先ほども言いましたように、福祉的な面でのプラス、高齢者の方などにも住みやすいといった点と同時に町の賑わい、活性化にもつながっているのではないかと思います。

32ページは、千葉の地域、これはあまり望ましい例とは言えない写真も入れております、かなり自動車が中心になっているというのが日本の町の特徴かと思えます。

35ページは、エッカーンフェルデという、ドイツの北のほうの人口2万人ぐらいの比較的小規模の町ですけれども、中心部は歩行者中心でかなり賑わっていたり、36ページなども似たような話で、小規模の都市であっても、中心部が歩行者中心で、高齢者にも住みやすく、賑わいを見せているという、そういった写真を37ページに入れております。

時間の関係で少し飛ばさせていただきます、ポイントとしては、44ページに書いてありますように、福祉政策と都市政策の統合というような視点が重要ではないかと思っております。これまで都市政策と福祉政策というのは、概して別々に考えられてきた面が多かったかと思えますけれども、これをできるだけつないでいく。これはそれほど難しい話を行っているわけではありません。先ほど来のお話、写真などにも示されていますように、中心部にケア付き住宅や若者・子育て世代向け住宅などを整備、誘導して、歩いて楽しめる商店街などとともに、福祉・医療の視点と地域再生、コミュニティ活性化等の視点を複合化するとか、中心部から自動車を排除して、歩いて楽しめるまちづくりにしていくとか、それが福祉・環境・経済にとっても相乗効果を持つという話であります。

その後に、宮崎駿監督のイラストに非常に印象深いものがありましたので、そういうよ



うなものも入れております。

46ページ以下にコミュニティ経済の資料を入れております。要するにこれは、できるだけヒト・モノ・カネが地域で循環していくようなあり方ということでもあります。49ページも皆様よくご案内の例だと思えますけれども、飯田市で、若者が故郷に帰ってこられる産業づくり、経済自立度70%というような試みをされています。こういったコミュニティ経済というようなものを展開していくことが一例と思えます。

53ページをご覧くださいだければと思えますが、これは私の千葉大の同僚の倉阪さんが永続地帯という、エネルギーの自給率がどれくらいかということによってやっておられる研究の結果で、県別に見ていくと意外に自給率が高い県があるということです。大分、富山に続いて長野県は4位で、ポテンシャルがかなり大きな領域もありますので、こういった点なども含めた地域内経済循環、これは既にさまざまな試みをされているという話も伺っておりますけれども、この辺りが課題になるのではないかと考えております。小布施の資料も入れさせていただきます。

時間がまいりましたが、付論1で鎮守の森・自然エネルギーコミュニティ構想という、私自身がやっているプロジェクトとか、付論2で都市と農村をつなぐという資料を入れております。あとは議論のときに深められればと思えます。ひとまず私からのプレゼンは以上とさせていただきます。どうもありがとうございました。

#### ○原山企画振興部長

廣井先生、ありがとうございました。

それでは次に、同じく、本日ゲストスピーカーとしてお招きをいたしました、わらしべキッチン代表の川渕友絵様からご講演を頂戴したいと思います。よろしく願いいたします。

#### ○川渕友恵氏

ただいまご紹介に預かりました川渕友恵と申します。本日は、皆様とお話させていただけるということをお大変うれしく思い、伺いました。ありがとうございます。

今、長野県栄村に移住しまして8年目に入ったところです。移住者がどんなことを考えて移住したのか、また日々暮らしているのかということ、私の体験を一つの例としてご紹介する中から、皆様のご参考になることがあればと思って、お話をさせていただきたいと思えます。

栄村に移住する直前は東京に暮らしていました。サラリーマンとして夫と一緒に暮らしていました。生まれは名古屋市です。進学とともに上京し、留学、海外赴任等で東京を基点に出入りしながら暮らしていました。右下にあります写真が私の夫のケビンです。あと娘、4歳になるモナという3人で、お米とか、あとは自給用の野菜を栽培しながら暮らしています。

簡単に私のプロフィールを紹介させていただきます。昭和51年名古屋市の郊外で生まれました。父、母、兄、私の4人家族です。父は自営業でイラストレーターをしております。商業デザインとか学校講師をしてまいりました。母は家業を手伝いながら、もともと食や農にすごく関心のある人で、生活協同組合の理事として産直運動ですとか、生産者の支援

とか交流活動などを長年続けています。

その影響もありまして、私も小さいときから農村に行って生産者の方と交流したり、また、名古屋の郊外のほうも、私が生まれ育ったときにはまだまだ空き地や畑がありましたので、山野草を春に摘んで一緒に料理をしたりとか、祖母と一緒に、小さな畑ですけれども、それを耕したり、あとはうちでも味噌、梅干、たくわん漬といったものを母が手づくりしていましたので、一緒に手伝う、そんな経験をして育ってまいりました。それが、今思えば田舎暮らしの原点になっているかなと思います。

大学に進学し、大学では国際関係論を勉強しました。このころは外交官になろうと思って留学などもしました。そこで今の夫に出会うことになります。

その後、大学院に進学し、このときは企業経営に非常に興味を持っておりまして、会計財務ですとか企業文化、企業価値を戦略的に構築する手法というものを勉強してまいりました。この分野で非常に実績、定評のあるアメリカの企業にゼネラル・エレクトリックという会社があります。ジャック・ウェルチさんという社長が長年、敏腕の経営者として活躍されたということで知られていると思いますが、この会社で財務分野の幹部候補生のようなコースがありまして、そちらで勤務をしておりました。ですが、30万人も全世界に従業員のいる会社ですと、やっぱり現場から距離が非常に遠く、もっと人の暮らしに近いところで私は仕事してみたいということで、都内にある小さな経営コンサルティングの会社に移ります。そこでは業務改善ですとか、マーケティングの支援などを中小企業の方に提供してまいりました。

その後はフリーになって、今もこのフリーのコンサルタントとして、地元の企業さんに、いろいろな面で、何でもやりますみたいなきには、スタッフが足りなければ私が店でレジを打って、そういうレベルのお手伝いから、いろいろとさせていただいています。

結婚して、その後、栄村へ移住しました。移住してすぐにワンライフジャパンという主にインバウンドのお客様、海外からの訪問者に対してグリーンツーリズムのサービスを提供する事業を夫と一緒に立ち上げます。

田舎に暮らす前というのは、本当に会社員として会社のために全てを尽くすような生活をしていましたし、東京で暮らしているとなかなか子育てをという意識が生まれにくいというんですか、どうやって子供を育てたらいい、子供を育てたいと思う環境になかなかないということもありまして、子供のことをあまり考えたことはなかったんですが、田舎に移ってきて、非常に恵まれた環境にあって、また、周りで家族で支え合いながら、きずなを大切に暮らしている地域の方の姿を見ていますと、やっぱり自分も家族を持ちたいなというふうに思うようになりまして、長女をもうけます。

その後、長野県北部地震で被災しました。我が家は幸いにもあまり被害が大きくなかったんですが、原発事故の影響がやはり非常に大きくて、インバウンドのお客様はパツパツやんでしまいました。また、その後、初めての仕事で、うちの夫が張り切り過ぎたと思うのですが、事故に遭い大きなけがをしてしまう。その間、1年半ぐらい全く仕事がないという状況が続きました。子供も小さいですし、夫が療養中ということで、私がこの土地で家族を養っていきける、支えていきけるような仕事を持たなければいけないと思ひまして、もともと関心のあった食と農をつなぐ仕事ということで、わらしべキッチンを立ち上げます。

その年の後半には、農林水産省の6次産業化認定事業者の認定をいただきまして、事業

に取り組んでいます。また野菜ソムリエとしても、県内の仲間と一緒に、県の成果物のPR活動などにも従事させていただいております。

こんな私ですけれども、移住の理由は何だったのかなというふうに考えて、4点ほど挙げてみたいと思います。まず、そもそも移住する人間は自然が好きという思いが必ずあると思います。私もそうでした。自然の中で体を使って、例えば登山とか自転車だったり、畑仕事とか、何か自然と一体感を味わえるようなことがとても好きでした。

また、都会でサラリーマン生活をしてしていると、緑や土、季節感を感じるということがまずないですね。朝起きて満員電車に乗って会社に行って、そうすると1年間、同じ温度で設定された空調の効いたオフィスビルの中で、パソコンの画面とにらめっこして仕事をしている。全く季節感がありません。残業して、10時に帰れば早いほうかななんて言いながら、終電だとかタクシーで帰るような生活で、休日を返上して仕事をするのが、ある意味当たり前、そんな生活をしていると、本当に人間的で健康的な暮らしがしたいという思いがどんどん強くなっていきます。

仕事中心のライフスタイルなので、自分が大切に思っているもの、友人とか家族との過ごす時間、趣味に費やす時間といったものがほとんどありません。本当に仕事のための人生のようなものになってしまいます。そうすると、あるときふと考えたんです。私、死ぬときに何か後悔しないで死ぬのかしらと思ったら、どうもこのままいくと、あれもしたかった、これもしたかった、あれもやらなかったななんて思いながら死ぬことになるなど、そのとき思いました。一つだけ言えるのは、私は失敗してもいいから後悔はせずに、人生の最期を迎えたいというふうに思いました。

自分のライフスタイル、自分のやりたいことや思いを実現する人生、自分らしさを実現するための人生に切りかえていこうと、このとき思いました。

最近、スローライフという言葉をよく耳にしますけれども、都会の生活は、ある意味、ファーストライフ、ファーストフードのファーストですね、非常に手軽で、効率がいいといえば効率がいいと思うんですが、そこからこぼれ落ちていってしまっている要素、本当は価値があるんだけど、効率化だったりとか、都市化の中で失われてしまった大切なものがたくさんあるのではないかということを感じようになりました。それは、例えば地域に根差したコミュニティに参加することとか、人と深くつながること、あとは手づくりすることです。お金を出して何かを買って、はいおしまいではなくて、自分がかかわって、お金を払うと結果はすぐに得られるんですけれども、そのプロセスを楽しむことができません。でも、自分で手づくりするとか、自給自足、農的生活、いろいろキーワードを挙げてみましたが、これはどれも時間の重みのある生活だと思うんです。それに対する、あこがれというのがやっぱりありました。それはきっと、私たちの世代というのは、スローライフを知らずに育ってきているからだと思うんです。年配の方とお話しますと、いやスローライフというけれども、昔は本当に不便だったし、苦しいことも多くて、不衛生だったりとか、いろいろな話が出てきます。だから、今のほうが絶対にいいとおっしゃる方はいらっしゃいますけれども、それはスローライフしか選択肢がなかった世代の方だと思うんです。

私たちはファーストライフで暮らしてきて、今、スローライフの選択肢があると。そういう行ったり来たりする自由とか、恵まれた環境にある私たちには、やはりスローラ

イフというのは非常に魅力的に映ります。

日本列島は災害列島とも言われますけれども、いつなんどき、どこでどんな天災が起こるかわからない。そのときに、私は自分の命を守ることができるかと考えたときに、東京での暮らしはちょっと無理だなと思いました。水、食料、燃料といったものが便利に普段の生活では得られていますけれども、では、何かあったときにどこに行けば水や食料があるかといったら、何も知らないわけです。ブラックボックスの中で生きていけると言えると思います。

それが一方、今暮らしている栄村の地域ですと、例えば水を例にとると、簡易水道です。どこの沢から水が来ていて、どこにどう水路を引っ張って、それを工事した人も周りにいたりという状態で、もし水が止まることがあれば、どこを直せばいいということがわかるわけです。自分たちで自力復興することができる。また代替手段というのが周りにあります。水道から水が出なくなっても、あそこに行けば水が飲めるとか、燃料は確保できる、食料はここでとればいい、そういうことがきちんと自分たちで把握できているという状態というのは非常にしなやかな強さ、レジリエンスなんていうことが最近言われますけれども、そういった強さではないかと。長野県で確かな暮らしという標語がございますけれども、そういったものにつながるのではないかと思います。その真逆が都会の生活、非常に危ういと思います。

こういった思いを日々感じながら暮らしていて、ではこの思いだけで移住ができるかという、なかなかそうはいきません。やっぱり思いありきなんですけれども、実際に移住をするのに必要だったのは、なじみの感覚というんですか、その地域との接点の多さだと思います。

私がなぜ信州を選んだかという、まさしく私にとってなじみの田舎と言えるのが信州だったからです。小学生のときは毎年、南木曾町に1週間、夏休みの間、林間学校で行っていました。そのときの感覚というのは本当に鮮明に今でも覚えています。朝起きたときの空気の冷たい空気感、森の匂いとか、川のせせらぎだったり、動物や植物、鳥や虫の存在感とか、そういったものが本当に強く強く私の印象に残っていました。

また家族で白馬、斑尾にスキー旅行に来たり、成人後、八ヶ岳周辺に登山や自転車旅行でたびたび訪れました。移住、田舎暮らしといったときに、私には頭に浮かぶイメージ、人の顔だったりとか、景色だったりとか、暮らしぶりというものがありましたので、非常にリアルでしたし、安心感がありました。これが移住に踏み切るときに一番大切ではないかと思います。やっぱり知っている感覚、わかるという感覚がないと、人間、恐怖心が先に立ちますし、恐れがあるとどうしても一歩踏み出せないと思うので、このリアルにイメージできるかどうかと、知っている感覚というのが非常に重要だと思います。

あとに挙げている立地ですとか自然環境、文化や伝統というのは、ある意味、日本全国どこでも大体、見ていけばあります。これは、必要条件だと思うんですが、十分条件ではないと思います。信州が選ばれるためには、信州がなじみの田舎になることではないかなと思います。

栄村での暮らしを簡単にご紹介したいと思います。今は、移住後すぐに始めたワンライフジャパンというものを夫が中心に運営しています。自転車、ウォーキング、ハイキングなどのアクティブな手段を通じて、地域の自然、生活文化、歴史的遺産を体験し、地域の

人と交流するようなポジティブな旅をデザインして提供しています。

私がやっているわらしべキッチンというのは、地域資源を活用した農業の6次産業化に当たります。ここでの狙いは、自分が起業しようと思った理由とも関係するのですが、自然と共生する自分が求めているようなライフスタイルを実現しつつ、でも現金収入もないと生活できないという、その両方を獲得する生活のモデルをつくりたい。これを、今はまだ二の足を踏んでなかなか踏み切れないでいる潜在的な移住希望者の皆さんに、こんなふうに生活することもできるんですよという一例として見ていただいて、では私もできそうだというふうにハードルを下げるような、そういうモデルになれないかと思って取り組んでいます。

ここから先は写真を見ながら、どんな雰囲気で行っているのかというのを皆さんに紹介したいと思います。

先ほども申し上げましたが、インバウンドの海外のお客様が多いです。家族ですとか、小グループ、または小さな学校の単位の皆様をご案内しています。自転車やウォーキング、ハイキングで、長野善光寺から始まって北信地域全域、そして隣接する新潟県をご案内しています。

本当に風光明媚、素敵なところがいっぱいあるので、そういったところを実際に私たちが足を運んでピックアップして、地図でも本当に細い道で、皆さんが普段だったらなかなか行かないようなところも、これはと思うところをご案内しています。

その間にいろいろ文化体験をしていただいています。各地に拠点がありますので、今はそういったところを利用する形で行っていますが、そういう拠点、体験はよくある体験です。こういったものだけではやっぱり面白くないということで、この土地に暮らす夫や私が面白いと思うこと、学んだこと、ぜひ伝えたいことというものを、インタープリテーションと言われるような形で、解説しながら、本当にその地域を深く知ってほしい。きれいだ、面白かった、おいしかったというのは大事ですけども、その裏にあるストーリーを知ってもらうことが、その地域を訪れた満足感をつくり出すのかなと思います。

家族などですと、地域の小中学校で国際交流事業と一緒に参加したりすることもあります。いろいろ国内外の小グループの皆さん、小グループと書いていますけれども、いろいろなニーズを持った方たちが来てくださいます。アジアですと、雪を全く知らない方が雪国の文化に触れるとか、いろいろな体験交流をさせていただいています。学校になると、こちらはオーストラリアの高校生の団体です。ここ3年、毎年来てくださっています。農村、農業体験をしながら農家民宿に泊まったり、村の人と交流したりなんていうことをしています。

こちらはカナダの大学の授業の学生さんたちです。右上で納豆を持っている方が先生で、日本文学の先生なんですけど、今年のテーマは日本食を文学的に読み解くということで、日本文化です。日本食ですとか、郷土食、自然環境と深く結びついたサステイナブルな食文化というものを知りたいということで、栄村の秋山郷に1週間滞在して、自分たちで原材料を調達して加工して食べる。それでどうかということ、文学のテキストと行ったり来たりしながら学習するというのをされてきました。私も地元のいろいろな情報をお伝えするというので、講義をしたりすることもあります。

こちらはわらしべキッチンの様子ですが、今は自ら生産した米が主な生産物なので、米

を加工したものですとか、あとは地域の農業者の方の副産物です。出荷できないようなものも加工して販売するような取組です。

この事業のモデルの一つポイントが、店舗を持たないでどこまでできるかというところだと思います。自前で店舗を持ってやるというのは非常に初期投資が要り、ハードルが高いので、今ある遊休施設、大体どこの市町村にも使われていない、でも使える施設というのがいろいろあると思うんですが、それを活用しながら、点と点をつなぎながら、うまく知恵を使ってネットワーク化するとどんなことができるだろうみたいなことをここで試してみたいと思っています、今は店舗を持たずにイベント販売ですとか、受注生産販売に取り組んでいます。

こうして移住8年目を迎えたんですが、今私が感じていることを、雑駁ですが、まとめてみました。

何よりも感覚的にすばらしいなと思っているのは、生きている実感というんでしょうか。自分で作ったものを食べられる。土を耕して命を育むというこの行為自体の持っている根源的な喜びも、何がおもしろいのかと言われると、それまでなんですけれども、何かすごい充実感なんです。体を動かす、ずくを出すことを惜しまなければ、本当に豊かな資源がたくさんあります。食に限らず、衣食住、さまざまな面で非常に豊かな土地です。

2番目の自然は裏切らない。自然という無限のものでいいですね。人工物というのは移ろいが激しいものですし、有限のものであると思います。その無限のものに抱かれて生きることが与える心理的な影響というのは非常に大きいなということも自分でも実感しています。日はまた昇るとか、どんなに厳しい冬であっても、必ず春は来ます。そういうものを実感していると、忍耐力、我慢強さとか、未来を信じる力というんですか、大丈夫だ何とかなるといような、そういった感覚が自然と生まれてくると思います。以前の私と比べると、ずっとそういう安心感を感じながら生きているなと思います。

この田舎ぐらしを一言で言うとなると、不便だけれども、それでいいんだということだと思います。都会と比較したら田舎はないものばかりだと思います。でも、その不便さを補うに余りあるだけのすばらしいところがたくさんあるわけです。

私自身もそうなんですけれども、なぜ、都会がうらやましくなってしまうかというのは、自分が田舎で暮らすに当たっての幸せの定義がゆらぐからだと思います。軸がはっきり定まらないと、あれもいいと、何か人の話を聞くと、あっちにふらふらこっちにふらふら、うらやましいとか、都会だったらこうじゃないかなとって、迷うわけです。迷うと、何か自分の生活が貧弱に見えてきたりするわけです。

ですので、私は何をここで実現したくてここにいるんだとかいうことを、都会で暮らす人もそうですけれども、自分が幸せになるためにはこれが必要であるとか、これだという確固としたものを持つ、意識するということが大切かなと思います。

それから、自然保育、自然の中で子育てをしているんですが、親がどうこう考えてごちよごちよやるよりも、自然の中で子供を育ててやることほどすばらしいものはないのではないかなと思っています。

長野県でも、信州型自然保育認定登録制度というのが発足するというのを伺っています。今週末にフォーラムが遠くのほうであるんですか。阿部知事さんも参加されるということで、今この自然保育を、栄村を拠点に北信地域でも展開しようと仲間が集まり始めま

した。知事の参加する今回のフォーラムにも仲間が2名、参加します。

移住者の皆さんは、いろいろ魅力的なことはわかると、でもやっぱり不安なんだ、仕事がないと必ずおっしゃいます。でも、私は、実際は仕事はあると思います。量としての仕事はあるんですが、質として移住希望者の方に応え切れていない可能性はあると思います。

それは地方にある仕事というのは労働集約型ですし、自然に密着した地域なので、季節性のある季節雇用が多いと思います。でも、大体都会から来られる方は、都会の延長線で物事を考えますから、事務職で正社員でといった段階で、もうほとんど何もないという感じになるんですね。

皆さん職の安定というんですけれども、地方での職というのは、かえっていろいろなものを組み合わせることによって安定性が生まれるんだと、季節によって違う仕事をするのが、この土地で生きることに即しているんだということを、移住を希望される方は理解する必要があります。そういった新しい職業観に基づいた自分のライフスタイルをイメージできれば、移住の仕事の不安というのは払拭されるのではないかと思います。

もう一つ、利便性がよくないという声も、先ほどのアンケート結果にもありましたけれども、そもそも都会と田舎というのは違うので、都会にあるものは田舎になくて、田舎にあるものは都会にないというのは当たり前だと思うんです。

スローライフというのは、ある意味、不便とその陰に隠れている喜びの行為の裏表の見方なのかなと思うんです。都会というのは便利で田舎は不便だけれども、その裏にある喜びとか価値というのをいかにきちんと認識するか、認めてあげられるかということだと思います。田舎イコール不便みたいに皆さん言いますが、田舎の中にも非常に差があります。栄村のように田舎の不便さを絵に描いたようなところもありますし、長野市とか松本市のような便利なところもありますので、抽象的に田舎移住を考えるのではなくて、具体的な情報に絞り込んで、一個一個きちんと見ていってほしいと思います。そのときに、自分や家族の求める条件は何なのかというのをきちんと棚卸ししていただきたいです。わからずに抽象的なイメージだけで来ると、おそらくミスマッチが起きて、不満、不成功につながっていくと思います。

こんなことを考えながら、私ぐらいの世代の人が定着するにはどんなことをやっていったらいいか、私だったらこんなことをするというのをまとめてみました。これは行政でやってほしいというよりは、こんなことをしたらうまくいくのではないかという、私のアイデアをまとめたものです。

まずは優先順位をつける。これはなかなか役所ではしにくいことなのかもしれないんですが、長野県は77市町村があって、それが全部、皆さんに来てほしいと思っているのは確かなんですけれども、全部の地域どうですかといっても、なかなかめり張りがなくて、受け手に対してアピールしにくいと思うんです。ですので、基準を絞って優先順位をつけてみてはどうかなと。その基準というのは、私はキーパーソンの存在がまず第一だと思います。地元出身で移住者と地元のあまり関心のない人の調整役になってくれる人、この人がいるかないかで、確実に成功の確率が変わります。

私もまちづくりをしている友人、知人といろいろ全国の例を話しているんですが、どうもこのキーパーソンの有無で、相当違うということが言えると思います。

それから、受入体制の整備度合、レディネス (readiness) と書いたんですけれども、

どれだけ移住者を受け入れられる体制が整っているかどうかというのが定着に相当影響しますので、キーパーソンがいて受入体制も整った自治体や地域から優先的にどんどん積極的に移住のPRをしていったらいいのではないかと思います。

あとは、成功して移住者が来てくれても、そこで長年暮らす環境が整っていなければ、定着することは困難です。ですので、どうしたらコミュニティというのが長続きするのかというのを、あらかじめデザインして、そこに必要な人材をこちらからリクルートしていく、ヘッドハンティングみたいなイメージとさせていただいていいと思うんですけども、そういう視点も必要かなと思います。

来る者は拒まなくていいと思うんですが、来る者を選んで求めていくという、こちらから足を運んで来ていただだけませんかというようなことも、やっぱり必要だと思います。

セミナーなんかも開催されているというお話でしたが、大都市圏でギャザリングということを書きましたけれども、今、若者のギャザリングといわれる集まりですね。カジュアルな集まりがいろいろありますので、例えばしあわせ信州シェアスペースで、毎月1回第3金曜日の夜は何かやっているよねと、信州に移住した人とかおもしろい人が集まって、信州産のワインを片手においしいものをつまみながら、わいわいがやがや、いろいろなことをやっている。そこに行くと、何かしら人との出会いや情報交換があると。例えばですけども、そういう仕組みがあってもいいんじゃないかと思います。

次に、信州ライフ・サポーターと書いたんですけども、要はリアルな生活情報がほしいんです。行政の観光情報みたいな情報を言われても、そこで自分が実際に生活しようとはなかなか思えません。ネガティブな情報もやっぱり知りたいということで、そういう生活情報を提供して、いろいろ相談に乗ってくれる世話係みたいな人が必要ではないかと思います。

その人のいろいろな疑問とか質問にトータルに答えるためには、担当制というんでしょうか、初めから最後まで一貫して同じ方が付き添ってくれるような感じで、できれば同世代とか、やっぱり時代感覚とか年齢に即した感覚というのがあるので、同じ目線で話ができるように、世代をいろいろ設けたらどうかなと思います。じっくり時間をかけて聞いていくことで、その方の条件に合う地域をご紹介しますようになります。ミスマッチの予防にもなりますし、なじみの田舎としての信州というものが、信頼感、親近感の中から形成されていくのではないかと思います。

最後のポイントは、動ける若者から引っ張ってくるということを考えると、通信インフラとか子育て世代です。そういったところにアピールできるような要素が必要だと思います。

今は、私自身もですけども、パソコンがあればどこでも仕事ができるという人は増えてきています。だから、そういう職種の人、そういう立場にある人にもどんどん来てもらおう、とにかく来てもらえるように、起業支援等含めて充実させていってはいかがでしょうか。どうもありがとうございました。

○原山企画振興部長

ありがとうございました。お二人から大変重要な論点を示していただいたと思っております。



### (3) 意見交換

#### ○原山企画振興部長

それではこれから意見交換に移りたいと思いますが。

本日、経営者協会の山浦会長は、所用のため途中退席をされますので、まず山浦会長からご意見、ご質問等をお願いいたします。

#### ○山浦委員（長野県経営者協会会長）

山浦です。お二人の先生から大変有益なお話を聞きました。実践しておられる川渕さん、大変素晴らしいことだなと思っておるわけであります。

この会議の目的は大きくは長野県の人口を増やそうということではないかと思っております。県でやっていただいたアンケートは、今までも言われてきたことを確認できたという意味で、まさにそういうことではないかと思いました。それから、廣井先生のお話は非常に納得できる部分があると思ったんですが、経済的なことから言いますと、定住の問題と、例えば観光とかとやるのが一致している部分が非常に多いなと私は感じたわけであります。

例えば、私ども経協としましては、企業誘致が結構重要だと思って、先ほどお話がありましたけれども、長野県の人口が減っている原因の大きなものは、社会移動といったもので、大きな会社の工場が結構出て行ってしまったんですね。電機メーカーを中心に、ほとんどの上位の電機メーカーの何らかの工場があったんですが、みんな出て行ってしまった。長野県のいわゆるGDPみたいなものも下がっていると考えております。

経協としましては、どうもそれはそれなりの理由があって、グローバル化の中で東南アジアへみんな出て行くものですから、長野県にあった工場も、あおりをくらって出て行ってしまったということではないかと思っております。

私は数年前から、研究開発型の企業さんに来てもらうことが、長野県の自然にも合いますし、今までお話いただいたような、ライフと、そういった研究みたいなことが何となくつながっていくのではないかと思っております。研究開発型の企業さんが長野県に来ていただけるということが、人口も増えていきますし、レベルも上がるというようなことではないかと思っており、それにはやはり、いろいろなことをやっていく必要があるのかなと思っております。

県で調べたようなことは、まさにおっしゃるとおりだと思っておりますし、そういう中で観光にも、こっちへ来るにもいろいろな施策があるわけでありまして、その辺を少し整理すると、企業がこちらへ来る魅力と個人が定着していく魅力が同じ、ダブる部分があるなと思った次第でございます。

今の川渕さんのお話ですと、教育問題とかいろいろなことの仕方を、スタイルを変えていくということと、今まで東京でやっていた教育みたいな世界を長野県に持ち込んでくるということと二つあると思うんです。ライフ自体も、長野県のスローライフを好む人と好まない人というわけでありまして、好んでる人がだんだん増えてきているなと私も実感としてあるわけですが、全てがそういう人だけではない。定住人口を増やすということでは

えば、全てがそういう人ではない、平均にそうでないと思うんです。いろいろな方法があると思っております。施策の効率性を考えても、いろいろ課題を整理して、実際にやってみていくこととうまく組み合わせながらいくのが非常にいいのではないかと思った次第でございます。どうもありがとうございました。

○原山企画振興部長

ありがとうございました。では、皆様からご発言をお願いしたいと思いますが、中山さん、いかがでしょう。

○中山委員（日本労働組合総連合会長野県連合会会長）

廣井先生と川渕さんのお話、本当にわかりやすく、大変ありがとうございました。

私が一番思ったのは、川渕さんから、働く者が地域で働くときには覚悟が必要だというお話があり、正規の社員で安定的な職がそこになればだめなんだというようなイメージではなかなか難しいのかなど。覚悟をして来て、地域ではそれぞれ働く必要がある。具体的に言いますと、賃金が下がっても、そこは仕方がない。あるいは、ずっとそこで暮らせるかどうかわからない。ただし、期間が限られていても、そこはみんなで寄り添いながら徐々に発展をさせていくというんでしょうか。お手元にお書きをいただいた、地域資源を活用した小規模の農業・加工という、このわらしべキッチンの基本スタンスですから、小川の庄のおやきなんか、まさに地域の物をグローバルというか、グローバルというか、世界と地域が一致する産業を起こして、そこに雇用を創出してやってみていく、そして定着していくということが必要だと思います。

長野県下、各地域のそれぞれの特性を活かした農業なり観光なりを産業化していく。そしてそこに、先ほど申し上げた必ず正社員でなくてはいけないということではなくて、覚悟して来てくれる人を選んで来ていただいて、そして、地域の人と一緒にみんなで盛り上げていく。それによって人口を定着させていくということの模索を、今後していく必要があるのかなと思いました。以上です。

○原山企画振興部長

ありがとうございました。高森さん。

○高森委員（長野労働局長）

先生方、大変ありがとうございました。非常にわかりやすい解説でございまして、大変参考になりました。

川渕先生のお話、実体験に基づいたものでありまして、一つは、長野県の中でなぜ栄村をお選びになったかということと、それから廣井先生には、雇用という面で地域経済の中でどう生み出していくかという視点、少しご説明いただければと思います。

○川渕氏

栄村を選んだ理由ですが、初めは栄村の存在も全然知りませんでした。銀座に「ふるさと回帰支援センター」というところがありますが、いろいろな地域を回った上で、あまり

にも情報が乏しいということで相談に行ったんです。

こういうことがしたいんですと言って聞いていただいたら、では後日連絡しますということで、連絡をいただいたのが栄村でした。その当時、高橋彦芳前村長が環境教育に力を入れたいということで、私たちがやっているグリーンツーリズムのようなプログラムをやりたい人に来てほしいというふうに言ったんです。村としても支援しますと、そう言っていただけたので、ではということで、栄村に決めました。

○原山企画振興部長

廣井先生、いかがでしょうか。

○廣井教授

ご質問のように、やはり雇用という点の一つ大きなポイントになってくると思います。

先ほどお話もありましたように、製造業というのはかなり海外移転が進んでいますので、これは長野県に限らず、全国的に空洞化が進むようなところがどうしてもありますので、私としては、もちろん製造業は今後も重要ですけども、それだけにあまり期待し過ぎると、なかなかそこは難しいところがあると思います。

一つは、いわゆるクリエイティブ産業と言われているような、創造性の高い分野ですね。これはいろいろ難しい面もありますけれども、文化とか、環境とか、福祉とか、あるいは、もともと伝統的にある職人的な仕事であるとか農業とか、そういうのも現代的な形で展開する新しい形で付加価値をつくっていく。これも言うはやすし、なかなか実際、難しいところもありますけれども、やはりそういう、広い意味での文化にかかわるようなクリエイティブ産業的なものと、それから、私はこれからはローカルな労働集約的な仕事、サービス業を中心とした分野がむしろ重要性を増していくと思っています。つまり、よく雇用がないから若者が地域を去っていくというような言い方がされたりするわけですけども、逆の面もあると思っています、人がどんどん去っていくから結果的に雇用がなくなってしまおうというような、にわとりと卵みたいな面もあって、人がいれば、そこにおのずといろいろな仕事とかサービスというものは必要になってくるものですから、そういう従来からあるいろいろなサービスの重要性、ローカルな地域密着型のサービスというのがむしろ重要性を増してくると思います。それをいろいろな形で行政で支援するような、その辺りも工夫していく余地があるのではないかと思います。

それから、長野県に関して言うと、やはり自然エネルギー関連はかなりポテンシャルがあると思いますし、もちろん農業は大きい分野ですので、そこをうまく組み合わせ、しかも、それとサービスとか雇用を生み出しやすい分野と結びつける形で展開していくというようなものがいろいろ工夫の余地があるところではないかと思います。

○原山企画振興部長

ありがとうございます。よろしいでしょうか、ほかにいかがでしょうか。

○牧島委員

(長野県農業協同組合中央会参事：大槻長野県農業協同組合中央会会長 代理)

本来であれば専務の春日がメンバーでございますが、代理の参事の牧島が出席させていただきます。

川渕さんの実際の話をお聞きして、長野県、栄村を選んだ理由が、なじみの田舎ということ、大都市に近いという条件、美しい多様な自然環境、受け継がれる生活、文化、伝統ということで、これどれをとってみても、「地域の食文化、いのちと健康の尊さ」が基本と考えます。私は生まれが飯田で、リニアという話もあるんですけども、心配な要素もあります。先ほどおっしゃった便利と便利でないこととの見極めというのはそれぞれの個人の判断だと思うんですけども、やはり交通は、東京と20分、30分だという話で、便利であっても、実際の魅力のある場所がどうあるべきかという、あまりそこには便利さは必要ないのではないかと考えました。

それと、なじみの田舎というところで、学童期の林間学校とか、旅行、スキーとか、いろいろとお書きいただいています。私も農業協同組合ですので、農にかかわりを99%持っておりますが、食農教育といったことも、季節的なものを中心にやっておりますけれども、若い学童期から田舎を知るという機会、あるいは食、農業を知る機会を通じながら、大人になったら住んでみたいという、そんな感覚を若いころから、学童期からイメージさせていくような取組を、それで大きなことはできないにしても、着実にやるということが必要かなと感じました。

○原山企画振興部長

ありがとうございます。中條さん、お願いします。

○中條委員（長野県連合婦人会会長）

お二人の先生、前回から引き続いての疑問をわかりやすくご説明いただきまして、本当にありがとうございました。

廣井先生のお話では、私が、こういうことを考えてこなければいけない時期ではないかと思っていたのを、一番初めのところでの本当の意味の豊かさの出发点になるのではないかというのが本当に胸に落ちました。

移住希望者ランキングで長野県がずっと1位でいるんです。この希望するというのが、今、川渕先生が言われたようなことを言われているのではないかと思うんですけども、それとプラスして、やっぱり一番は働く場所という話も前回も出ていましたので、何かもう一つ、お話いただければいいかなと思っています。

川渕先生は実際に、今住まわれていることで、胸に落ちるお話だったんですが、ここでしていい質問かなとは思うんですけども、よく田舎暮らしは男尊女卑とか、ちょっと暮らしにくいとかということがあるんですけども。もし、そういうようなことであれば、私たち女性としても県民としても、移住される皆さんを受け入れるに当たって、もう少し考えていかなければいけない部分があるのかなど。でも、今の時代、そんなことはないのかなということもありますし、何かお考えになられたことをお聞きしたいと思います。それから、今までいろいろな市町村で林間学校みたいなことをやっているんですけども、それを移住につながるように、一歩前進させるような施策も大事なのかなというふうに考

えました。よろしくお願いいたします。

○原山企画振興部長

それでは廣井先生からお願いいたします。

○廣井教授

人口減少というのは必ずしもマイナスばかりではなくて、真の豊かさへの一つ出発点、転機ということ話をさせていただきましたし、それと長野県に移住希望のランキング1位というのは、まさにクロスするといいますか、そういうこれからの豊かさの日本のあり方を、一つ、長野県がリードしていくような、そういうポジションにあると思うんです。

それを具体的にどういうふうにさらに発展していくかということで、これは一つは、お話の中でも申したんですけれども、やはり私の中では、長野県は教育とか文化の豊かさというようなイメージがありまして、課題としては、高等教育とか20代以降の教育の部分で学びの環境、学びと仕事も一体となったようなものの整備、支援みたいな、私は「後期子供」なんていう言い方をしているんですけれども、今、人生全体が長くなって、20代全体が働くと同時に学びの時期みたいなところがあって、その時期の支援というのが非常に重要で、そういう世代が過ごす場所としては長野県というのは本当に理想的な場所だと思いますので、その辺の学びと、職業訓練的な要素も含めたいろいろな支援策、農業や職人的な仕事とか文化関連とかもかなりいろいろ展開する余地があるのではないかというふうに、外からの視点になりますけれども、思っております。

それから、今の話ともちょっと重なりますが、私は、ケアというような言い方をしているんですけれども、ケアというのは人が人をケアする、サポートするというので、ちょっと話が広がってしまうんですけれども。実は農業というの、アグリカルチャーと言いますが、カルチャーというのはもともと耕すというような意味から来ていて、実はケアと語源的には同じというのがあり、同じように文化というのと同じような語源から来ている。その農業や自然エネルギーとケアというのは、福祉とか医療は非常に雇用を生み出しやすい分野で、今、非常に大きくなっている。それと文化というようなものをうまく結びつける形での施策の展開みたいなことが、私も今、いろいろ模索中なんですけれども、その辺が雇用も生み出し、地域の経済循環もつくっていくような姿としてあり得るのではないかと思っています。その辺をいろいろと検討して、切り開いていくようなことを大いに期待したいというところがございます。

○原山企画振興部長

ありがとうございました。川渕さん、お願いいたします。

○川渕氏

先ほど男尊女卑というようなことのお話がありましたけれども、確かに田舎に行くと、男性と女性の役割分担が非常にはっきりしているなと思うことはあります。

例えば寄り合いがあると男性が戸長として出て行くとか、そういうことがあると思うんですが。私は、昔は男女は平等であるべきという考え方でずっといましたけれども、やっ

ぱり田舎に来て生活をトータルにしていくと、男性の役割、女性の役割、または男性がするとより効率的、女性のほうが得意な役割とかということがあると思うので、今はあまり男女の区別があること自体にはそんなに抵抗感もないですし、私の住んでいる集落では、女性のほうが、何というんでしょうか、軽んじられるということはないです。女性は女性たちで声をまとめて総会に出しますし、母ちゃんたち結構力が強いんです。母ちゃんがうんと言わないと、うちでお父ちゃん、ちょっとつらい目に遭うので、やっぱり表は偉そうな顔をしていても、お母さんがギュッと肝を握っているみたいなのところはあると思います。その辺、女性のほうが器が大きいのかもしれないなと思いますけれども、あまり男尊女卑を問題として感じることはありません。

2点目は、林間学校から一步進むにはということだったんですけれども。おっしゃるとおり林間学校から実際、自分で移住を判断して実行するまでには20年近い年数がありますので、種はまいたけれども、それがいつ、どういう形で収穫できるかというのは考えるべきかなと思います。ある意味、発芽率を上げるためには、その20年の間にある程度、布石を置いておきたいというふうに思います。その布石というのは、やっぱり人とのつながりではないかと思います。

例えば林間学校でお世話してくださった地元の方としっかりつながるような機会を設ける。農業体験をさせてもらって、すごくいいおじちゃんがいたではなくて、このおじちゃんの名前とか、生い立ちとか、どこに住んでいるとか、そういうところまでしっかり印象づけるような形で、ここに戻ってくるとこの人がいるということ意識してもらおう。そこで例えば年賀状の交換が年に一回だけでもあったとか、たまに行って訪ねる家があるとか、そういうことで、ふとしたきっかけで、またつながりができるかもしれない。それが長い20年の間に1回、2回あるだけでも、移住を本格的に考えるときに感じる親近感とか、つながりの強さというのは計り知れないものがあるのではないかと思います。

#### ○原山企画振興部長

市川さん、いかがでしょうか。

#### ○市川委員（長野県市長会事務局長：菅谷長野県市長会会長 代理）

先ほどの廣井先生のお話を聞いている中においては、まさに「まち」・「ひと」・「しごと」かなと思いつきながらお聞きをしたところでありまして、川渕さんのお話の中には長野県を、栄村を選んだ理由というものに、行政の立場からすると、施策として何が有効かなというヒントになっていたということで、お聞きをしていました。

私ども市長会という立場は、行政に携わる者でございますので、どうしても有効な手立てというのは何かというのをいつも考えるわけでございます。その中で、人口減少であったり、少子化というものがあるがためにこの会議があるというように考えているわけですが。長野県の市町村も含め、全国津々浦々の市町村がいろいろな施策を打ち上げてやっているんですね。何か目新しいものというのはもうないのではないかとというぐらい種類は多様にあります。要するにポイントは何かというふうに考えたときに、必要な人に必要な支援をしたいというのがポイントかなと思いついて、そうすると、いろいろなメニューがある中において、誰がどこで、どの程度、どのように支援するのかということ

になっていくのではないかと考えています。

そういう意味では、国も、今度、政策パッケージというような言い方を始めていますが、メニューはたくさんある中において、何を市町村がやるのか、何を県がやるのかという話になってくるのではないかと考えています。

先ほどの資料1の中にも、東京在住者の4割が移住希望だというデータがありましたが、例えば30代以下の若年層という人を見ても、一律に仕事があれば行きますという人だけではないわけです。個々に事情が違いますので、その人その人に、実情を見ながら支援する内容が変わってくると思います。そういう人たちに対して、誰が、どのように、何を、どの程度という話になりますので、その辺が行政として、国、県、市町村との役割分担も含めての話ですが、この辺が明確になってこないかなと思いますし、市町村の立場からすれば、それに当たっての何らかの財政的な支援が国からあるとありがたいなと思っているところでございます。

#### ○原山企画振興部長

ありがとうございます。大森先生、お願いいたします。

#### ○大森顧問（東京大学名誉教授：県政参与）

川渕さんが駒場を卒業されたのは平成12年でしょ、私もその年に定年退職したかな、駒場を。国際関係論というのは駒場の中では最も優れた学生が集まる場所です。その川渕さんがここを選ばれて、こういう暮らしをしているということについて、私は誇らしく思いますね。東京大学も捨てたものではないというふうに思います。

お二人の話で共通していても私もそう思っているんですけども、工業化が進んだ地区の人々の意識やふるまい方というのは、一種、昔風でいうと、向都離村だったんです。都に向かって村を捨て去っていった。これが多分逆転したんだと思っています。だから、向村離都になり始めた。これは文明史的な大転換が起こり始めたんだと思います。

廣井さんがおっしゃっているように、人口が増えた時期というのは必ず第一次産業から人が去っていくんです。それが止まったんです。止まったことはいろいろな理由があって止まっているんですけども、その後、何が起こるか。必ず都市から違う流れが農山村、漁村に来る。これは世界的に言うともうなっている。我が国もそうなる。だからそれ自身はいいことだと思いますけれども、さて、その後、どんな苦勞が待っているかということになりますので。

したがって、川渕さんがおっしゃっているように、どこで暮らそうが、どこへ行こうが自由です。これは最も根本的な自由です。人はどこでどういう暮らしをしたいかということを選択できるわけです。その選択の道が大きな時代の転換で私は広がり始めたと思っています。別にみんなが東京を目指す必要はない。ということは、今までの発想で言えば、やっぱりどこかで東京、大都会へ出て行ってそこで志を遂げようとしたり、うまくいけば攻をなし、名を遂げて、ふるさとに錦を飾ろうとしていた。その文化は、決定的に私はなくなった、変わったと思っています。むしろ、農山漁村地域こそ自分の志が達成できる場所なんだというふうに変り始めている。それが私は日本の将来の展望だと思いますね。

だから、今までのように追い求めるのではないのが新しい暮らし方、暮らしに価値が満たされ始めている。そういうふうになっていくんじゃないかと、私もそれが正しい道筋ではないかと思っています。あとは細かい政策部分がいっぱいあるんですけども、大きなことにおいてはそうだと、長野県は間違いなくこの道筋をたどろうとされているのではないかと、知事は必ず、そういう道筋を立てようとしているのではないかとというのが私の感想です。以上です。

○原山企画振興部長

では、ここから阿部知事も加わっていただいて、また自由な意見交換にさせていただきます。

○阿部知事

お二人のお話、大変ありがとうございました。大学の話であるとか、自然エネルギーの普及拡大だとか、森のようちえんであるとか、長野県がやっぴいこうとしている方向性は間違っていないなというのを確認させていただけたと思っています。

ただ、全体的な政策をどう組み立てるかというのは、パーツパーツだけではなくて全体を設計していかなければいけないというのが、私の悩みでありまして、廣井先生におっしゃっていただいたように、やっぱり私は長野県こそが日本の新しい時代をリードしていかなければいけない地域であると。だけど、その入り口には立っているけれども、まだしっかりその足場を築いて踏ん張る形にはなり切れてないというのが、今の私の正直な感覚です。

それで、一つは私の悩みというか、廣井先生のお話にあったように、まちづくりのあり方、県ももっとまちづくりに力を入れろというので、若干、建設部の組織は見直したんですけども、基本的に県・市町村の関係で、私は横浜市にいまして、廣井先生にも大分お世話になりましたけれども、横浜市は政令指定都市なんで県の権限と市町村の権限と両方持っているので、非常に強力にまちづくりをやるんです。先ほどの海外の事例みたいなことも一気通貫の権限でやりやすい。ところが、県・市町村に権限が分かれているとなかなかやりづらい。そういう意味で、もう少しまちづくりについて、市町村としっかり話し合わなければいけないというのが、私としては一つ、問題意識としてあります。

私の問題意識ですが、廣井先生にお伺いしたい点が二つありまして、一つは今回の知事選の公約にも「バイ信州運動」をやりたいと、要は経済を地域内で循環させようということを行っているんですが、これは、かけ声をかけるだけならやさしいんですけど。長野県の総合計画は「貢献と自立の経済構造への転換」と掲げています。自立というのは、先ほどのエネルギーとかも含めて、自分の足でしっかり立っていきましようということ、貢献はほかの地域にもしっかり役に立つようにしていきましようということでもあります。ある程度、地域内での循環を通じた自立を模索していかなければいけない中で、この経済の地域内循環というのは実際どうすればいいのかということと、もう1点、私は、ベクトルは確かに変わってきているんですが、かといって、日本全体を考えたときに、では今度は都市が衰退して農山村だけ元気になればいいという話でなくて、多分、都市部も農山村もともども共存していかなければいけないと、ともに反映してい



なければいけないときに、都市と農山村との連携が非常に重要だと思っています。ここは、具体的にこんな視点があるんじゃないかというのが、もしあれば教えていただけるとありがたいと思います。

○原山企画振興部長

では、まずその2点について、廣井先生。

○廣井教授

いずれも非常に核心的なところをご指摘いただいたと思うんですが、1点目の地域内経済循環、これは今、非常にホットなテーマになってきていると思います。先月も環境省でのある地域内経済循環の会議が始まったり、数年前にも総務省関係であったり、それから里山資本主義といった議論もあったり、これは、まだ非常に新しいテーマで、先ほど飯田市の例も挙げましたけれども、まだまだ模索が始まっているような段階で、これからのテーマだと思います。

一つはやはり、産業連関分析というような手法がありますが、地域でどういう形でヒト・モノ・カネが回っているか、これは県レベルではある程度やっていますが、市町村レベルではまだです。一つはそういう少しローカルなレベルも含めて、産業連関分析的な、ヒト・モノ・カネがどういう形で地域で循環しているかをまずしっかりと把握していくというような、これはちょっと地道な作業になるとは思いますけれども、そういったことを進めていく必要があると思います。しかし、それはあくまで現状の診断みたいな話で、ではどうしたらいいかということになると、また別途考えていく必要があると思います。

そうなってくると、私はやはり、一つキーポイントになるのは、お話にもありました自然エネルギーとか、それから広い意味で農業も含めた分野がポイントになってくると思うんです。ただ問題は、自然エネルギーの多くの分野は、太陽光は特にそうですけれども、必ずしもあまり雇用は生み出さないという問題があるので、そこはうまく雇用を生み出す福祉・医療のような分野、先ほどまさに森のようちえんのお話もありましたけれども、そういった分野と結びつけたり、それから、今日、雇用の話が何回か出ていますけれども、産業連関分析的に見ると、実は雇用をたくさん生み出しているのは従来型のサービス業とか飲食業とか、割と従来からあるものが雇用に結びついている面があります。

そういうサービスをうまく現代的に文化と結びつけたりもして付加価値をつけていくような形、これもなかなか言うはやすく、難しい面もありますけれども、その辺と組み合わせで発展させていく。そのポテンシャルは、長野県は非常に兼ね合うところかなというふうに思いますので、その辺をいかに発展させていくかということ。

それから2番目が、都市と農村というのはまさにそのとおりだと思っていて、今日資料でお話させていただく時間がなかったんですけども。結局、都市と農村というのはお互いを必要としていて、よく、財政的には都市が自立していて農村が自立していないように言われていることがあるわけですけども、食料やエネルギーから見れば、都市は農村なしではやっていけないわけで、都市と農村というのはまさに相互依存の関係にある。都市中心だった見方がようやく少し改善されてきていると思います。

知事がおっしゃられたように、農村だけでやっていけるわけでもなく、都市と農村、両

方必要なので、私がそこで重要だと思っている視点は、県の役割、県庁の役割が今ここで非常に重要になって来ているのではないかと考えています。都市と農村を結ぶ、あるいは結ぶというより、さらに言えば、私は都市と農村の再分配というのがやはり重要だと思っ  
ていまして、放っておくと、どうしても経済的には都市が有利になるといいますか、農産物や自然エネルギーというのは市場経済では非常に低く、安く評価されがちなので、何らかの公的な政策、例えば再生可能エネルギーの固定価格買取制度、あれは国の制度ですけれども、それは一つの例で、少し価格を高め  
に設定して支援するとか。私としては、県庁の役割として、都市と農村の持続可能な相互依存を支えるための再分配とい  
いますか、特に農村への支援みたいなことが、かなり重要になってくるのではないかと考えております。

#### ○阿部知事

どうもありがとうございます。まさに都市と農山村の連携、県としてもしっかり取り組まなければいけないと思  
いますし、私は地域を元気にする、地方創生で重要な分野は医療と教育だと、実はいろいろところで言っている  
んです。

どうしてか、供給サイドの医療・教育の視点じゃなくて、雇用の場とか、そういう観点で、実はあまり行政は  
この分野を見てきていない。昨日も発達支援の関係でいろいろな人と話したときに、改めてこの教育と医療が  
地方にとって重要な分野だと感じたのは、教育と医療のところは、結構細かいところまで国が相当規制して  
いるんです。例えば私学助成はこうしなさいとか、医療と福祉もかなり国が細かに決めていて、そのベースの  
ところを、国がもちろんしっかり支えてもらわなければいけない分野であることは間違いないんですけれど  
も、教育と医療を考えたときに、地方が主体的に考える発想が今まで足りていなかったという面もあり、国  
の関与が実は多い分野だということを改めて私は感じているんですが。大森先生、そこら辺、いかがなもの  
でしょうか。

#### ○大森顧問

教育は、今回の議論のつながりで言うと、さっきもご議論が出てきたんですけども、各地域の大学、私は  
専門学校、農林の専門学校の役割は増してきていると思います。ただこれを実施するときに、立ち  
はだかっているのは文部科学省と県の教育委員会です。関係者がいると怒られるかもしれませんが。

これは簡単に行きませんで、片一方で国民教育を持っているものだから、その地域で生まれる人たちは  
地域の人間として育っていかなければいけないみたいな、その部分を自治体が担っている話になって  
いるんですけども。何かにつけて非常に集権的な体制が続いています。ただ、これは市町村長がどれ  
だけ頑張れるかですけども、今回、法律が直りましたので、教育長の任命権を持つと同時に、教育に  
関係する計画、大綱を設定できますので、そのときに、小中学校の子供たちがその地域で生まれて、  
そこに誇りを持ち、愛着を感じ得る、そういう教育を呈していこうというチャンスが生まれてくるのが  
可能性の一つで、それはある程度できると思うんです。

ただ、多分、知事がおっしゃっているのはもうちょっと大きいお話になってきますので、一つは、  
域枠連携みたいな、各地区の学校や専門学校が地域の産業とか地域づくりという形でかかわれるか。  
大学の先生の中にもその意識を強めている方々がおいででございます

ので、そこが一つの可能性と見ています。

医療の問題は、これは現地でみんな悩んでいるんですけども、特に農山村は病院がない。病院がないと子供は産まれないかという、そんなことはないです。実は本当に必要なのは、安心して妊娠して出産すると、その支援があればいいので、それは別に病院に限ってないんです。病院がないから子供は産まれないということはないと、その体制を新しくつくらなければいけないと思うんですけども、それもある程度、県と市町村が頑張ればできないことはない。

とりあえず、大きな分権改革は霞が関は簡単に動きませんので。ですから、その狭間を何とか工夫して、県と市町村で頑張っていく、この領域についてもできることをやり抜く以外にないのではないかと私は感じるんです。あまり展望が開かれてないんですが、とりあえず、それで頑張るといことだと思えます。

#### ○原山企画振興部長

そろそろお時間ですので、知事から最後、まとめのあいさつをしていただければと思います。

#### ○阿部知事

今日はお二方から大変貴重なお話を、そしてご提言もいただいて、ありがとうございました。

廣井先生には、ぜひ理論的な部分でまたご支援いただければありがたいと思えますし、川渕さんは、実際に移住された立場としてもっと人を引きつける、まさにご自分で書かれていたんですが、キーパーソン側として力を貸していただければありがたいと思えます。

川渕さんも書かれていますけれども、私は大都市の生活というのは、一見華やかですけども、非常に脆弱な基盤の上に成り立っているなと思っていますし、そういうことを考えたときに、やっぱり地方がしっかり自分たちの足で立っていないと、日本全体が危うくなるのではないかという懸念を私は持っていますので、大森先生にも引き続きお知恵をいただきながら、長野県がこの地方創生の分野で、ほかの地域をリードしていくことができるように頑張っていきたいと思えます。

今日は大変貴重なお話をいただきましたし、また皆さんからもいろいろな意見をいただきまして、ありがとうございました。また次回にしっかりとつないで、いただいた意見は我々としては活かしていきたいと思えますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

## 4 閉 会

#### ○原山企画振興部長

以上で、第2回の「長野県人口定着・確かな暮らし実現会議」を終了させていただきます。どうもありがとうございました。